

成田
 歴史
 玉手箱

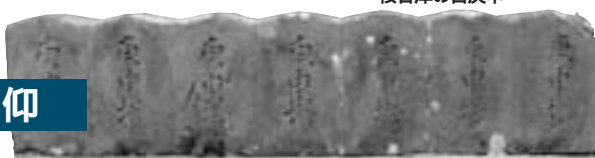
48回

歴史と伝統文化の
 まち・成田。市内に
 は、歴史ある文化財
 が多数あります。

宝田・後の百庚申
 の青面金剛像



その形が大変珍しい宝田・
 桜谷津の百庚申



庚申信仰

庶民のささやかな願いを託す

中国から伝わった道教の教えの中に、「人の体内には三戸という三匹の虫が棲すみつき、庚申の日にその虫が体の中から抜け出し、天の神にその人の悪行をいいつける。天の神は罰として寿命を縮めてしまうので、庚申の夜は眠らず酒食をとりながら過ごすのが良い」という一節があります。江戸時代になると「酒食をとりながら夜を明かす」という教えは「庚申待ち」として庶民の間に広く浸透しました。この功德を願うために建てられたのが庚申塔です。一般的には一基単独ですが、同じ場所に数多くある場合を百庚申と呼んでいます。

現在、百庚申は竜台、宝田(後、桜谷津)、西和泉地区で4カ所確認されています。竜台は市内最大で、その数99基。寛政12年(1800)から安政6年(1859)にかけてのもので

宝田には国道408号沿いに二つの百庚申があり、下福田と隣接する後地区には文久2年(1862)を中心に29基、桜谷津地区には明治時代を中心に27基。桜谷津の庚申塔の中の13基は変わった形態で、横長の石に縦に6本の線を刻むことで7つに区画し、それぞれに庚申塔の文字を彫ったものです。西和泉地区は年代が不明ですが26基現存。以前

は野毛平との境界にありましたが、市道の改良工事のため隣接する民有地に移設されました。

竜台ではかつては毎年7月1日の前後の申の日に、絵燈を飾って庚申待ちを行っていましたが今では消滅してしまいました。宝田後地区では今も7月の申の日に庚申祇園が行われ、宝田桜谷津でも昭和の10年ころまでは庚申祭が行われていました。現在、地元のおばあさんたちが毎月1日にお参りをしています。

ところで百庚申の中には青面金剛像を刻んだ像があります。像の下には「見ざる・言わざる・聞かざる」の三猿が彫られています。これは庚申の申に通じ、三戸の虫の告げ口を封じる意味があります。もし悪さを見られても「見ざる・言わざる・聞かざる」になって神様に教えないでくださいという願いが込められたのでしょう。また、庚申信仰は道祖神と結びつき、旅人の道中を守る神、悪霊の進入を防ぐために神として村境に祀られました。

娯楽と信仰を兼ねた庚申信仰は時代とともに薄れ形を変えました。しかし、家族や地区の繁栄・安全・長寿を願う気持ちは今も変わりません。



今年の3月に移転・整備された西和泉の百庚申



市内最大規模を誇る竜台の百庚申。平成6年3月に市の有形民俗文化財に指定されています

編集後記

成田市と下総町、大栄町の合併は県知事の決定も済み、あとは総務大臣の告示を待つのみ。いよいよ来年春の合併に向け秒読みの段階に入りました。そこで本号から毎月15日号で両町の見所などを紹介することに。といってもこちら

だけでは片手落ち。実は下総町は「成田市・大栄町」を、大栄町は「成田市・下総町」を広報紙で紹介していくことになっているのです。一緒になるにはまずお互いを知ることから。今後の連載にご期待ください。